

# 中央アフリカ共和国の旅①

～バンギからバタンガフオへ～

小村 幸二郎

## ボツサンゴアへの道

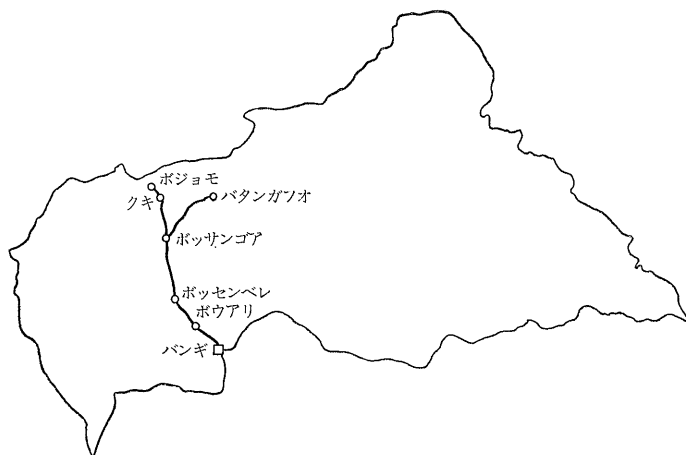
中央アフリカ共和国の鉱物資源探査・開発の技術援助を目的として 日本からはじめて公式に派遣される機会に恵まれた私は 日本を出発する以前から かなり緊張していた。 そのおもな理由は この国の実状を知るに足る各種の資料を出発前にほとんど入手できなかったこと 国土のほとんどが サバンナと密林におおわれていることは確かであり その上に 赤道アフリカ地帯特有のラテライトによっておおわれている可能性が強いのので 恐らく 鉱床露頭はもちろん 岩石の露出を見ることがほとんど不可能ではないかと懸念されたこと ツエツエ蠅や猛獣や毒蛇などによる危機感にもとづく精神的疲労 それに 日本の公館がこの国にまだ設置されていない現在 今回の技術援助が ただ技術援助というだけではなく 日本とこの国とを公式に結ぶ重要なパイプの一つであるともいえる重要な意義をもっていると考えられていたので そのパイプをより太く より強くするためにはたとえ短期間の調査旅行ではあっても 一つでも成果を挙げなければ任務を全うすることにはならないという責任感などであった。

しかし 日本のおよそ2倍の面積をもちながら人口がわずかに1/50にすぎない人口過疎 しかも 本誌221号で述べたように 野外調査にきわめて不利な条件下にあるこの国での2カ月間の調査旅行では どう考えてみても 鉱床露頭を発見することはほとんど不可能に近い。 あらかじめ既知鉱床を指定され その価値判断を行なうことを目的とする調査であれば比較的気が楽だが 50万分の1地質図幅と 150万分の1地質図を頼りに 調査地を選定する いい換えれば 鉱床賦存を予測することは決して生やさしいことではない。 しかも 今回は一発勝負である。

キンシャサを発ってバンギのムポコ空港に到着する直前に 飛行機の窓越しにオレンジ色のラテライトと深い密林を見たときに 気が滅入ってしまった。 しかし もう後へは退けない。 人事を尽くして天命を待つだけだ。

150万分の1地質図を頼りに 日本を出発する前に計画した調査経路のうち 日程の都合で 西部地区を割愛しチャド盆地の南縁に広大な地域を占める変動時花崗岩地帯と中央部の構造帯とに新露頭発見の望みをかけて 調査計画書を作成し 水森林鉱山大臣の認可を得た。 そして2月2日 自動車による 5,684km の奥地旅行出発の日を迎えた。

午前7時にはバンギを出発することになっていたので 6時にはすっかり身仕度して待っていたのに 迎えのランド・ローバーが来た時には すでに11時を過ぎていた。 結局 ホテル前を出発したのは12時30分 一日のうちで一番暑くなるという真昼間である。 12時から2時30分までは役所も商店も休みだし 中心部にあるボカッサ市場を除いては 人の姿もあまりみられない。 昼食をすませてものんびりと午睡をしようという時刻なのに われわれは昼食抜きで出発である。 総勢9名が 座席が1列しかない2台のランド・ローバーに分乗して 舗装されていない道を 300km 以上も走ろうというのだから容易ではない(第2図)。 その狭苦しい座席に シンチレーションカウンター 距離計 ミネラライト カメラなどを抱えて3人掛けしているのも大変だが 座席に乘れずに キャンプ用品 食糧 ガソリンその他を満載した上に乗っている3人の辛さは並大抵ではない。 舗装されていない道を時速80km 以上で走ることもしょくない調査旅行の間 私は 荷物の上に乗っている3人が



第1図 調査行程図

振り落されはしないかと心配のしどおしだった。しかし ラテライトの赤いほりをかぶって肌の色さえさだかでなくなった3人は 「すごいほりだ」と笑いながら 苦痛を表情に現わすことはついぞなかった。私にはとても真似のできないことだが これも自然児のたくましさのあらわれであろう。

バンギの11km 北方にあるインビの検門所を過ぎると道路は 北西方へ向かう未舗装の1号線と 北東方へ向かう舗装された2号線とに分かれる。どちらも一級国道である。私たちは1号線へ車を向けた。これから2カ月間は舗装道路を走ることはない。

先カンブリア期Aの珪質岩を主とする変成岩類が完全にラテライト化しているこの付近の道路は サバンナの緑に映えて実に美しく 真の独立国を目ざしてたくましく躍動する現在のこの国の真紅の血潮のほとばしりを想わせる。そして 激しく揺れる車に身をゆだねている私には 果しもなく打続く緑の野を しとやかで優美なたたずまいを見せるかと思えば 突如として 怒り狂う巨象のような激しさで突進むこの赤く そして猛々しい道が この国がたどってきた過去を そのまま表現しているようにも思えた。

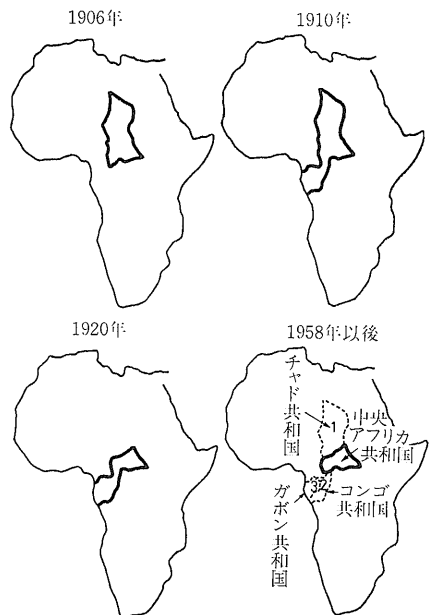
ごく少数のピグミー族を主とする住民が この広漠たる高原地帯で 自然の恩恵に依存して秘やかに平和な生活を営んでいるのを発見したのは 1800年 フランスの探検家ドリズイであった。そして この発見後間もない1805年以後 本誌221号で述べたように 外部からこの国へ移住してくる人が急速に増えていったわけであるが そうした外部からの移住も 奴隷狩りに関係した諸国が奴隷禁止令を發布した 1945~1950年を契機として急速に減少していった。



第2図 旅行出発直前の調査用車ランド・ローバー 右はしの人物はコック 中央の人物はコック助手

一方 コンゴを勢力下に治め ここを拠点として中央アフリカへの進出を計っていたフランスは 1889年に初の駐屯部隊をバンギへ派遣し いわゆる植民政策の実行に着手した。しかし その植民政策が 自国の経済を直接にうのおす物資の確保と自国への移入を主目的としたものではなく すでに手中にしていたコンゴの大西洋岸と紅海 およびソマリア沿岸とを 軍事的・政治的に結びつけることを主目的としていたことは容易に推察されることであり その例証の一つとして 1898年バンギからスーダンへ向かったフランスのマルシャン派遣隊とこれに抵抗したイギリス軍との間に発生した ファシヨダ事件を挙げることができる。先進国として古くから栄えていたヨーロッパの国が 自国とは遠く隔たったアフリカの野で 戦火を交える姿は 一体 先住民の眼にどのように映ったのだろうか。また フランスのこの地に対する植民政策の実行に際しては障害がなかったわけではない。たとえば 北辺の町ンデレ付近ではフランス軍と地元のアラブのサルタン軍との間に 中生層の台地を舞台にして 戦闘が展開されたといわれている。こうした戦は 当時 随所で行なわれていたのが 槍と弓矢は所詮火器の敵ではなかった。

そして この国の南限となっているウバンギ川と北限となっているシャリ川の名をとって 当時ウバンギ・シャリと呼ばれていたこの地は 1894年に フランスの領土の一つとなった。その後 この地における行政機構は徐々に整備されはじめ 1900年には本格的な整備が開



第3図 中央アフリカ共和国の国土の変せん

始された。1906年にはチャドと合併されてウバンギ・シャリ・チャドとなり 1910年には さらにコンゴとガボンがこれに加わって フランス領赤道アフリカ連邦となった(第3図)。

初のアメリカ人が宣教師として渡来した1920年 フランス領赤道アフリカ連邦からまずチャドが削除され 第2次世界大戦終結の翌年に当る1946年に フランス領赤道アフリカ連邦の改革が本格的に開始された。1956年には各領土に自主的政府機関の設置が認められ 1958年遂に フランス領赤道アフリカ連邦は解体し 同年12月1日 中央アフリカは共和国を宣言し パルテレミイ・ボガンダが初代大統領に就任した。しかし すべてに一きわ秀でていたパルテレミイ・ボガンダ大統領は 国民の尊敬と期待を一身に担い 長年待ちつづけてきた完全独立への道を国民とともに力強く歩みはじめはしたが 1959年3月29日 不慮の航空機事故に遭遇して 不帰の人となった。

この国がはじめて迎えた夜明けの道は まったく予期せぬこの出来事によって 一瞬のうちに 闇に閉ざされはしたが パルテレミイ・ボガンダ大統領の従兄に当るデヴィッド・ダッコー氏が第2代大統領に就任して 再び 明るい未来へ つながる道となった。そして 「アフリカの年」と呼ばれる1960年 中央アフリカ共和国は 8月13日に完全独立を宣言し 9月20日に国連加盟国となり 外国の支配下におかれた一つの植民地として生きてきた66年間の過去を清算して 世界の真の一員として生きる日を迎えた。

1960年12月 政府は野党の中央アフリカ民主革新運動を解消し 以後は従来の与党である黒アフリカ社会革新運動(Movement d'Evolution Sociale de l'Afrique Noire)だけの一党制となった。しかし 完全独立を果たし一党制によって政治が行なわれるようになったとはいえ まったく問題がなくなったわけではなく それは第2代大統領が初代大統領と近い血縁の者であったこと一つを例にとってみても 多くの人の疑問と憶測とを招く何かが底流にあったとも推察される。

そして1966年1月元旦 ジャン・ベデル・ボカツサ将軍が 軍隊を率いてクーデターを起こし 第3代大統領に就任して現在に至っている。

この国のこのような歴史の流れに想いを馳せそして現実を見つめる時 いわゆる植民地であった当時の姿と独立国となり そして 成長を続けてきたであろう現在の姿とは 当然 変貌しているにちがいない。しかし これからの奥地旅行で様々のことを体験するにしても

独立以前と以後との姿を比較することは私にはむずかしい。ただ 1960年に独立したアフリカの17の国のうち10年後には 独立当時の指導者の10人が完全に失脚するかまたは死亡し そのうちの2人が暗殺され そして新しく指導者となった10人のうち8人までが軍人であるという事実を知るとき 何かを深く考えさせられる。靴を掲げまたは頭上に載せた小学生が 5~6人づつの群をつくり じゃれながら帰って行く赤道の右手で 突然 すさまじいばかりの火の手が上がり 黒々とした煙が あくまでも澄みきった青空の中へ 真直ぐに吸いこまれてゆく。

サバンナ地帯では 時折 突如として火事が発生するものらしいが この火は どうやら 野焼きの火らしい。赤道アフリカのサバンナ地帯の土壌は ラテライトで代表されるように 異常なまでに鉄分が多くて窒素や燐に乏しく また 密林地帯の土壌はカリやマグネシウムが乏しくなっている。どちらかといえば耕やしやすサバンナを焼くこの火は 現に生きているものを焼き殺しはするが需要のほとんど100%を輸入に依存している肥料の入手が容易ではないことからみれば 経済的負担を必要としないこの野焼きは 新しい生命を生み出すために考えられたすばらしい人間の智恵と経験とによる所産の一つである。

子供たちの姿が絶えてからは 家も見えず 対行車もなく 視界に入るのは青い空とその下に続くサバンナの緑と赤い道だけである。パンギから約70kmのボウアリで 車の調子がおかしくなった。マンゴの並木が続く道路の一隅に車を停めて点検してみると ガソリタンクはすでに空になっており これと連結されている予備タンクのコックが開いていて これもすでに空になっていた。これでは車が息切れするのも当たり前だ。

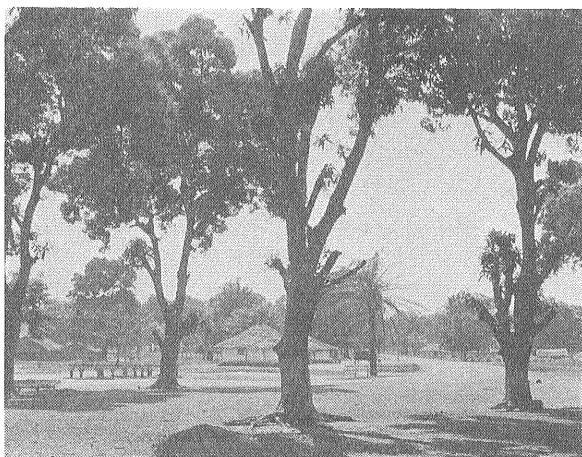
ボウアリの町の中心から若干離れているらしいこの付近の風景は マンゴの木とそれが路面に落している影とその向こうに見える萱葺きの家などがうまうま調和しているせいか 美しくそして静かなたたずまいを見せている(第4図)。昼食抜きで走ってきた私たちは 木蔭に入って 国産ビールのモカフとフランスから輸入されている缶入りのミネラルウォーターであるエビアンとで喉を潤ほし パンと缶詰の鰯を昼食代りにとった。村人が数人寄ってきた。とても愛想がよい村人は はじめて見る東洋人に興味があるらしいが それだけではなく 食物や飲物にも関心があるようだ。しかし それらの食物や飲物は 私たちが直接に購入したのではなく 同行の鉱山地質局のプロスペクターであるムッシュウ・

パトカーが整えてくれたものである。こうした時は現地の言葉を覚えるのに絶好の機会でもあるわけだが今はそうした時間のゆとりはない。

早々に食事を済ませて ボウアリを出発した。町並を過ぎて間もなく バンギから道路にびったりと寄り沿っていた4本の電燈線は 右へ大きく迂回して 視界から消えた。この電燈線の基点は 有名なボウアリの滝の近くにある この国最大の水力発電所である。

「ボウアリ滝への道」と書かれた大きな立看板をうらめしげに見る私の気持を知らぬげに ランド・ローパーは 時速75kmで この滝への分岐点を過ぎ バンギ近郊ではもともと有名な観光地となっているこの滝を見る機会は完全に失せた。私は 夜は照明に浮ぶというこの滝を見ることを一つの楽しみにしていた。それはこの国が誇るこの滝の美しさを観賞するという欲望でもあったが 真意は 岩石の露出をほとんど見ることができないだろうこれから後の調査旅行を より有効にする一つの手段として この滝付近に露出している珪質岩を主とする先カンブリア期Aの新鮮な諸岩石をぜひ見たいという一つの願望であった。しかし 先を急ぐこの日の旅の途中では この滝へ行く時間的ゆとりはなく 私は 遂に「滝を見たい」とはいいい出しきれなかった。それにしても 予定通りにバンギを出発していればゆっくりと岩石試料を採取できたものを 今となってはもう後の祭りだ。

1本10フラン(13円)のマニオクを売る女たちが道路傍にずらりと屋台店を出しているヴァングウの村を過ぎ 4時10分にボッセンベレに到着した。ポケットに入れていた高度計は海拔750mを示している。



第4図 ボウアリ付近の風景 大きな木はマンゴ この道路は国道1号線で カメルーン連邦共和国への主要ルートとなっている

深い緑にすっぽりと包まれた谷に囲まれた丘の頂に広がるこの町からの眺めは実に雄大である。車から降りると 粋な制服制帽をうまく身につけた50歳ぐらいのお巡りさんが 足早にやって来て 直立不動で拳手してくれた。

「バラオ モウ イイキ ンジョニイ(今日は お元気ですか?)」

「メルシイ ミンギ(有難うございます) スイ ンジョニイドクトル(よくいらっしやいました博士)」

「モウ イイキ ゴ ティンド ウオ(お国はどちらですか?)」

「ムビ イイキ ゴ テイ ジャボン(日本です)」

いささか緊張ぎみのお巡りさんの顔に 笑が浮んだ。喉の渇きを覚えて 近くのビストロに入ってみた。40m<sup>2</sup>ばかりの土間の片隅にしつらえた棚に モカフが20本ばかりとモカフの工場で作られているソーダ水が10本ばかり並んでいるだけで客はいない。泥壁に萱葺きの家の中は冷んやりとして心地よく 20歳を過ぎたばかりらしい店の主は 注文のビールをグラスに注ぐとすかさず サンゴ語の音楽のレコードをかけてくれた。

ビールは 生温かくて決して美味くはないが 渇ききった喉をうるほすには十分だし 高さ1mばかりの手製の木箱に納められたスピーカーからは実にポリウムのある陽気なメロディが流れはじめた。サービス満点だが この若者も 日本人にはじめて逢って緊張していたのであろう 自分から話しかけようとはしなかった。

夜ともなれば 町の中心部にあるこのビストロは 人々の憩の場となつてにぎわい モカフが景気よく並び 明るい笑と音楽の中で夜更けを迎えるのだらう。そして はじめてこの地を訪ずれた日本人のことが 今夜の話題を独占することはまず間違いない。

ゆるやかにうねる丘の斜面を一気に下って 平原に出た。車窓から見る風景はほとんど変化しない。パイアがたわわに実るバツデバの村を過ぎて間もなく 灼熱の太陽は ようやく力尽きて 草原の果てにゆったりと身を沈めていった。夜のとばりの訪ずれは意外に早く 車窓からはみ出した右腕を 冷気が突刺してゆく。ヘッドライトの光の中に 二つの人影が浮んだ。月の光もない暗闇の中を歩く二つの影は 槍と弓矢を手にした 男と女であった。恐らく 一日の野良仕事を終えて家路を急いでいるのだろうが その足取りには疲れはみられない。

道路傍に 点々と火が見える。電燈のない生活を送

る村人が憩の夜の一時を迎える焚火である。寝るためにだけ使われる田舎の家の前では こうした焚火を囲んで 家族揃って食事をし 話に興じている人々の姿がよく見受けられるが この火は 多分 猛獣の襲撃を防ぐ役目も果たしているのであろう。

完全に闇に閉ざされた7時 夜空を焦がす野焼の火がぐんぐん迫ってきた。棒切れを片手にした5歳ぐらいの裸ん坊が 燃え盛る炎の近くに立って 動こうとはしない。襲いかかる炎に棲家を追われて逃げ出してくる小動物を見様見真似で 引捕えるつもりなのか すぐ近くに建っている萱葺のわが家に飛火しないように見張っているのかは判らないが 私には 生活の智慧によって生み出された野焼の火に立はだかるその小さな裸が 実にたくましく思えた。いわゆる文明社会に生きる人々は 恐らく わが子をこうした状況下におくことはなからう。そして そうした社会においては 自然は憩の場か己の征服欲あるいは名誉欲を満たしてくれる場としての存在価値しか認められないことが多いようである。

この小さな裸が思いがけなくたくましく見えた理由はよく判らないが もしかしたら 無意識の中に 自然の偉大さと美しくさとから遠く隔てられた社会に生きる者のヒ弱さをもつ自分の広大な自然を生活の場として生きる者への憧憬と 強さの魅力とを 眼のあたりに見たせいかもしれないし また 少年時代 小高い山の頂に登っては青い海原に無数に散らばった大小様々の島々を眺め 海に潜っては真珠貝や魚を求めた頃をなつかしく想ったせいかもしれない。私が少年時代を送った海辺には 無数のカプトガニがのんびりと干潟を歩いていたし 木枯風の吹きすさぶ頃の浜辺には 大きなイカが打ち上げられているのをよく見かけたものだ。しかし 美しい海岸美を誇っていたこの土地は やがて 産業振興の波をもろにかぶって 海は埋められ 生物はいつの間にか死に絶え 土地は繁栄を迎えたものの いつの間にか 疲れ果てた過疎地へと変わっていった。そして今は大きな貨物船が横付けになっていた栈橋は朽ち果てて 跡形もなく 山の形は変わり 若者の姿は余りにも少なくなった。その美しくしさはもう返ってはこない。

哀愁を秘めたタムタムの音がどこからともなく聞こえてくる。そのリズムと音色は すべてを閉ざした暗闇の中を走りつづける車に身をゆだねてきた私の心を 妙にゆさぶった。中央アフリカの夜道をはじめて走っていることは確かではあるが パンギで20日間ばかり過すうちに この国の人たちとの間の精神的な一つの壁はま

たたくなくなり 今はすでに 異郷にいるという実感がどうしても湧いてこないほどこの国に溶け込んでいるのに なぜ タムタムの音がこうも自分の心をゆさぶるのだろうか。

一日の労働を終え 家族揃っての夕食を済ませた後の一時 タムタムを叩き 歌い そして踊る村人たちの姿が脳裏に浮んでくる。音楽が人の心や動きや自然の情景を表現する一つの手法であるならば 消え入りそうに低く 静かで ゆっくりとしたリズムから 突如 狂乱を想わせるように 高く 激しく 早いリズムに変わるそのメロディは 祖先から受け継がれてきたものであるだけに 彼等が抱いている何かを表現していることは確かだ。私には それが何であるかはもちろん判りはないが 喜怒哀楽を表現しているにちがいないと思えるそのメロディが 彼等がそして彼等の祖先が激しい歴史の流れに身をゆだねてきた過去の姿と 未来へかける夢とを 象徴しているように思えてならない。

7時30分 ボッサンゴアの入口に着いた。ランプを灯す道傍の夜店では 大人も子供も 駄菓子を食べ お茶を飲みながら話に興じている。

オウアム県の県庁所在地であるボッサンゴア市は この国第三番目の人口をもつ街だけに賑やかなのだろうが ごく一部を除いては電燈がないので そのたたずまいはさだかでない。

何はさておき 県知事官邸へ挨拶に伺ったが 県知事は チャド共和国との国境の町マルクンダへ旅行中とのことで 留守であった。県知事夫人に挨拶を済ませて間もなく 小型の乗用車がきて 軽装の2人が降り立った。一人はフランス語よりもイタリア語の方が得意という市長のベナム・ピエール氏 小柄のもう一人は県庁の総務部長のサービス・ニコラス氏である。初対面の挨拶を済ませた後 近くのホテルでビールを付会うことになった。ホテルとはいっても 木造2階建の小さなもので 客の収容数は10人前後らしい。もっとも 旅行者も少ないのであろうから 堂々とした白亜のホテルは必要ないのかもしれない。だが 土地があり余っている国だけに 庭は広々としており 広いベランダも中々いける。

私たちがそのホテルに着いた時 ベランダの片隅のテーブルで 制服姿の男が一人静かにグラスを傾けていた。聞けば ボッサンゴアの税務署長さんとのことだ。どちらかといえば 市長さんは謹言実直型 総務部長さんはいかにもその職務にうってつけの性格らしく 客人を倦きさせないゼスチャー入りの話術は大したものだ。



第5図 マンゴとブーゲンビリアに包まれたボッサンゴアの宿舎

いささか疲れてはいたが 三人の実に巧みな接待ぶりに つりこまれて 時のたつのを忘れた。夕食前の私たちは三人に厚く礼を述べて宿舎へ向かい 9時20分 バンギから314kmの第一日の旅は終わった(第5図)。

電燈のない宿舎ではあるが 幸に 水道は使用できるし シャワーも使える。ラテライトのほこりをかぶったせいかわ作業シャツはもちろん 今朝おろしたばかりの下着までも赤く染っていた。頭からかぶった水はほこりと睡気とを洗い流してくれた。コックのジュル爺さん(第6図)と助手のパスカル(第7図)が準備した夕食は ランプの灯を頼りに ささやかにはじまりそして実に 呆気なく終わった。

ランプの灯を頼りにメモを書き終え 11時過ぎに寝袋に入った。朝早く起きたこともあって やはり疲れていたのであろう。旅行第一夜のねむりは早かったようだ。

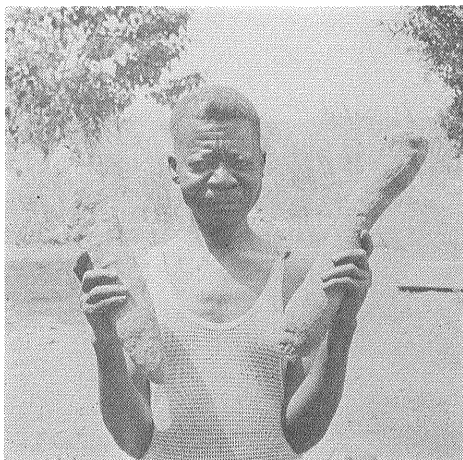
### 調査第一日

昨夜はぐっすりと眠ったらしく 午前5時30分の眼ざめは実にさわやかであった。エビアンの缶1杯の水で歯を磨き顔を洗って そーっと表へ出てみた。夜のとはよりはまだ完全にはあけきつてはいないが 宿舎の玄関の横に咲くブーゲンビリアの真紅の花は素肌を鮮やかに見せていた。昨夜は暗くて何も見えなかったが この宿舎が建っている敷地内は美しく手入れされ 敷地内を突切る道路の両側にはマンゴの巨木が繁っている。胸一杯に冷んやりとした空気を吸って このマンゴの並木道をオウアム川へ歩いてみた。昨夜からゴトゴトンと伝わっていた音は 宿舎から150mばかり離れた所にある綿工場(第8図)の機械の音であった。この綿工場は24時間操業なのであろう。工場の入口で仕事をしている若い労務者が4人 げげんそうな面持で 私をじーっと見つめている。

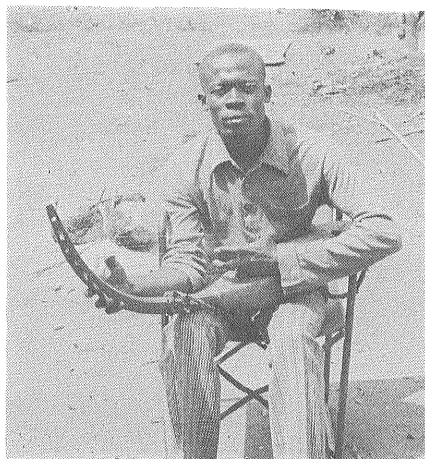
オウアム川は朝もやの中に音もなく 水の流れは 点々と突き出ている岩を やさしくなでている。岸辺に舫う丸木舟の近くに 瘦身の老人が佇んでいる。何を見つめ 何を考えているのか まったく動こうとはしない。

突然 近くの草がざわめき 水ガメを頭に載せた少女が2人 ひょっこりと姿を見せた。大柄の花模様がある短かめのワンピースに身を包んだ少女のあどけない顔が私に向かってほころび 真白な歯がこぼれた。

- 「バラオ」
- 「バラオ ミンギイ」
- 「モウ イキ ンジョニイ？」
- 「メルシイ ミンギイ」
- 「イル テイ モウ イエン(お名前は?)」
- 「イル テイ ムビ シモン(シモンです)」



第6図 コックのジュル爺さん 右手に持っているのは主食となるマニオク 左手に持っているのはグイと呼ばれる芋 マニオクは皮を剥いで水につけてふやかしてから センイ質の部分を取り除き 残りを天日で乾燥させ さらに臼と杵で粉末にしこれを熱湯で練って食べる かなり酸っぱいが馴れると結構うまい 主成分は澱粉である グイは自然薯とそっくりの味で 日本人向きの野菜である



第7図 コック助手のパスカル手に持っているのはこの国独特のギターで 1本の木で作ってある。右側のふくらんでいる部分は 木をくり抜いて動物の皮をはってある。弦は7本で両方の手で弾くが 半音はでない

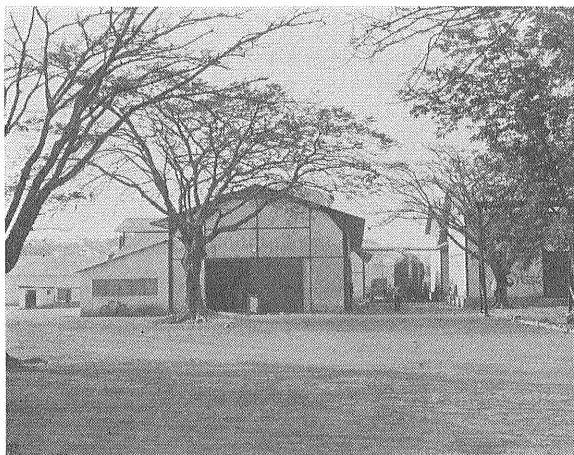
朝もやに包まれて音もなく流れる大河の水 その岸边に佇む老人と一艘の丸木舟 水を汲む少女 (第9図)。

私は 夜露に濡れた草に腰をおろして 実に美しく実に平和なその光景を見つめながら 時のたつのを忘れた (第10図)。

パンとコーヒーの朝食を終って 第一日目の調査に出発する。目的地はチャド共和国との国境から約30km南方のボジョモ部落付近である。赤道アフリカの一日の活動は早く始まり メイン・ストリートを足早やに歩く人の姿もかなり多い (第11図)。

宿舎近くのガソリンスタンドで給油し すぐ近くの雑貨屋でプラスチック製の水筒を買った。邦貨にして約500円のこの水筒は 本来は油か何かを入れるためのものであろう。店内には衣類から食糧品まで多種多様の商品が並んではいるが 肉と魚だけは見当たらない。バンギのスーパーマーケットでは生のイカ タコ 貝 魚

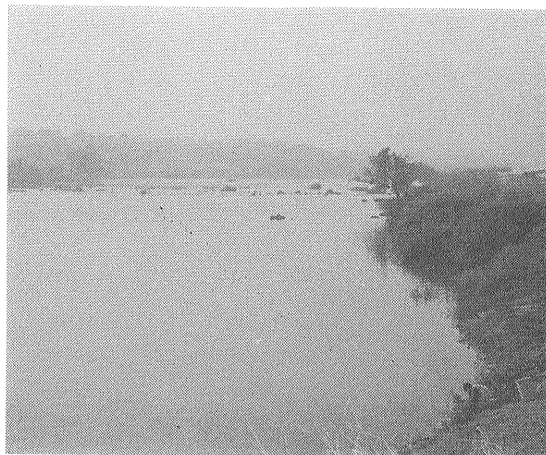
肉類などを売っているが この店で売っているのはほとんど缶詰だ。しかし バンギから遠く離れている割にはバンギとくらべるとそれほど高くない。ボッサンゴアの市街を離れて国道1号線を北上する途中 マニオク 野菜 果実 小動物 薪などを頭に載せて ボッサンゴアの市場 (第12図) へ向かう多くの村人に出逢った。彼らがどれほど離れた所からそうした品物を売りにやってくるのか判らないが 黙々と歩く彼らの表情には疲労のいろはみられない。遠方から品物を売りにきた彼らはその品物を売った金で子供への土産や日用品を買い そしてある者は 市場近くの BAR TI KODORO (第13図) で 喉の渴きをモカフでうるほし ほんの一時の語らいを楽しんだ後で 家路をたどるのであろう。それにしても 強靱な体力と脚力とが生活を全うするための第一条件となっているのであろう彼らの姿には 深く考えさせられる何かがある。



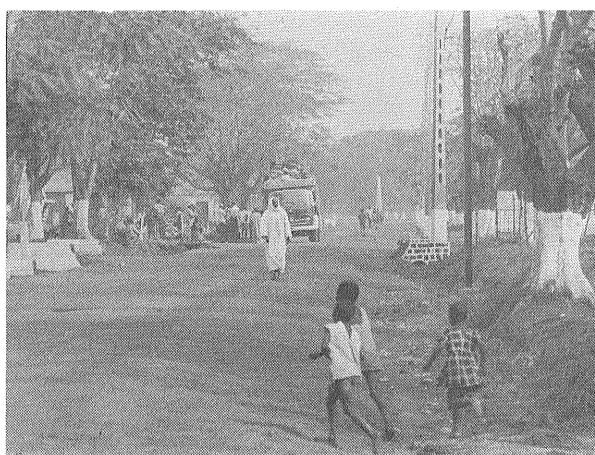
第8図 ボッサンゴアの織工場



第9図 ボッサンゴアのオロム川で水を汲む小女



第10図 ボッサンゴア市内を流れるオロム川



第11図 ボッサンゴアの中心地付近 中央の白衣の男はアラブ系 後方の白い塔近くに県庁がある

ボンゴヨで2級国道24号線に入った。これからクキまで約21kmの道路は大して荒れてもいないがクキを過ぎたとたんに道はがぜん悪くなった。車の速度は20km前後に落ち激しく揺れるたびに右腕がドアにぶつかる。運転手はもちろん大変だが当方も決して楽ではない。ボジョモ(第14図)に着いた時にはボッサンゴアを出発してからすでに4時間が過ぎていた。交通信号もなければ対向車もほとんどないわずか118kmの道である。

ボジョモは泥煉瓦と萱葺きの家が道路に沿って数10戸並んでいる静かな村であった。暑い盛りのせいかマンゴの木蔭で立話しをしている数人の女性以外には人影も見当らない。商店らしい造りの家も見えないようだが日用品などを商う店があるのだろうか。

チャド共和国との国境になっているナナ・パイヤ川の1支流がボジョモの2kmばかり東方で道路を横切る地点で車を停めて早速調査にかかった。北辺の町ンデレ付近から続く変動時花崗岩々体の南端部付近に当るこの地区にはこの他に先カンブリア期Aのクキ層群と第三紀のチャド層群が分布しているはずだが地形が

ほとんど平坦である上に植生におおわれているので露出はみられそうにない。

ツエツエ蠅の恐ろしさを書物で知りまた同行のプロスペクターから聞いていた私はものすごくむし暑い灌木地帯を歩き廻ろうというのにフード付のアノラックを着皮手袋をして万全を期した。しかも腰にはハンマー 鉈 クリノメーター 肩には図ノウ カメラ 距離計をさげ サンプル袋 医薬品 水筒などを入れたサブリュックを背負い シンチレーションカウンターを手に掲げている。相当な重量物を身につけて歩こうというのにこの調査地内には道がない。

歩き出して5分ばかり過ぎた頃花崗岩を不整合におおうチャド層群の基底部付近と推定される付近で弱い放射能異常が見つかった。まったく未知の国での調査第1日目のしかも調査開始直後のこの発見は私にとっては何よりも嬉しい出来事であった。しかし残念ながらその異常は躍起になって追跡させるほど連続してはいなかった。

灌木をくぐり抜け 密生する高さ2mばかりの萱をか



第12図  
ボッサンゴア市場 建物は一見アラブ建築に似ている。商品の約80%は野菜と果実である



第13図 ボッサンゴアの市場近くの飲屋の看板。BAR TI KODORO (村のバー) Samba ti Centrafrique 中央アフリカのサンバ) MOCAF はバンギに工場があるビール会社の名前 象はこの会社のマーク



第14図 チャド共和国との国境から約30km南のボジョモ部落付近にはマンゴの木が茂り 道路の両側にカヤ葺きの家が建ち並んでいる 在日中央アフリカ共和国大使館のバルーム氏は この部落の出身である



き分けながら調査を進めてゆくのは楽ではない。かつてサウジ・アラビア王国で 陽蔭でさえ 49°C であった夏の初め 一日 8 時間以上も直射日光を浴びて調査に励んだ時も辛かったが 今は その頃とはまったく違った何かの いつの間にか 身体を触んでいるような感じである。

露出を求めてとぼとぼと歩きながら 毒蛇 ツエツエ 蠅 猛獣などに気を配り シンチレーションカウンターから眼を離せないで 精神的な疲労が大きいせいでろう。 2 m ばかり前を歩いていたガストンが 不意に立止り 目くばせして 銃に 5 mm の散弾をこめた。私は ガストンが何を見つけたのか分らないながらも 「早く逃げろ うまく逃げろ」と一瞬祈った。ガストンは 足音をしのばせて 50 m ばかり獲物を追って行ったが とうとう 銃口が火を吹く瞬間はこなかった。「ガゼル(鹿)がいたんだが」とがっかりした面持で弾を抜くガストンを気の毒に見やりながら 私はほっとした。私とて 荒漠たる大地で野宿を重ねながら 片時も静止しようとはしない苛酷なまでに厳しい自然とそこに生きる人々を 長い間見つめてきた人間である。野生動物の繁栄を計るために 自然の節理として弱肉強食が行なわれ ある程度はそれを殺すことが必要でありそうすることが そこに生きる人々や動物の生命を永らえるための方法の一つであることぐらいは 百も承知している。

しかし 狙われた鹿がガストンの銃からうまく逃げきることを祈った私の胸中に はじめて訪ずれたこの国の美しい自然の静かなたたずまいを損うことをおそれそして 今までは何の恐怖をも抱かずに餌を求め歩いていたであろう野生動物に対する憐憫の情と 調査第一目に血を見ることを極度に嫌う気持とが 去来したことは確かだ。だが こうしたウェットな気持も たとえ短かい間とはいえ これから先 喜怒哀楽と起居を共にする自然児の一人の友としてこの大地にたくましく生きようとする私の胸中から 日を追うごとに 次第に薄らいでゆくことだろう。そうした心の変化は 生物に対する愛情 いわゆる動物愛護という面からみれば 精神的惰落とみなされないこともないが 一面 自己のおかれた環境に逆らって生きることのむずかしさ というよりはむしろ そうした環境の中で生き抜くために必要不可欠のものであろう。新しい生命を生み そして それを育むためには 死を余儀なくされるものがなければならぬ。それは 人間の社会においても また 野生動物の社会においても 避けようとして避けること

のできない大いなる自然の偉大な掟の一つである。

調査旅行中は 午後 1 時 30 分に仕事を終了することになっているということだが この日調査を終えた時には 1 時 30 分をとくに過ぎていた。うるさくつきまとう無数の蠅に悩まされながら 木蔭で一休みする。パンギを出発する直前に買求めた氷を入れたアイス・ボックスの中では モカフとエビアンが凍らんばかりに冷えていた。 渴ききった喉を突刺すような冷たいビールとエビアンは 水道設備や井戸がきわめて乏しいこの国では 最高の清涼飲料水になっているようだ。固くなったパンと缶詰の練をエビアンで流しこんだ後 現地を離れた。これから 100 km 以上も悪路を走るのかと思うとうんざりする。しかも 一番暑い時刻である。

目もくらむような強烈な光の中を ひどい揺れようで喘ぎながら ボッサンゴアを目ざして行く。グラス 1 杯のビールが切角眠りの淵に誘ってくれているのに 激しく身をゆする車は あくまでも それを妨げようとする。まったく腹立たしい道だ。

雨季に備えて 橋の架け替え工事が始まったらしく 20 人ばかりの若者が働いている。今朝は彼らを見かけなかったので この工事は始まったばかりなのだろう。

直径 50 cm ばかりで長さ 10 m ぐらいの丸太は恐らくケイボックスだろう。その上に 長さ 5 m ばかりの丸太を並べて蔓で縛り 石を敷きつめ さらに砂利を敷くと橋は完成するが 長さ 10 m 余り 高さ 5 m ぐらいのこの橋が出事するまでには 人力だけが頼りだけに かなりの日数を要するようだ。

クキの家並を過ぎて間もなく 砂塵を高く巻いて この国ではよく見かける白い小型乗用車が 前方から突走ってきた。そして 行き交う折 その車を運転していた婦人は すがすがしい微笑を残して行った。クキの小さな教会の主であると思われるこの婦人は 飛行機も通わないこの辺境の地で もう何年ぐらい生活を営んでいるのであろうか。ほんの一時の出来事ではあったけれども 私は その婦人のさわやかな微笑の中に 神に仕え 文明を遠く離れて生きる人々を限りない愛情をこめて導く身というだけではなく 達観した人の強さと美しさをかいま見た。あの優しい微笑が失せない限り 婦人はきっと この町で あるいはより奥地で 美しくそしてより強く生きてゆくことだろう。

暑さと疲れとにうんざりしていた私は 多分フランスからきているのであろうその婦人との一瞬の出逢いに 暑さ 寒さ 疲労 荒れ果てた道 そして 乏しい食生

活を当然のこととして受け容れるまでに至っていない自分の弱さを思い知らされた。決して若くはないこの婦人との一瞬の出会いと それによって得 そして 考えさせられたことは 私の脳裏に生涯強烈に焼きつけられていることだろうし また 折にふれて ともすればくじけそうになる私を強く励ましてくれることだろう。そしてそれは 私にとって この日最高の収穫であったように思える。

陽ざしが幾分弱まってきた。紺碧の空にくっきりと浮んでいたゆるやかにうねる丘の連なりが いつの間にか 淡い紫色に変わっている。獲物を求めて山野を駆け回っていた男も 野良仕事に精を出していた女も ぼつぼつ家に帰っているらしく 通り過ぎる村には人影が濃くなってきたようだ。

すばらしいプロポーションの身に色あざやかな民族衣裳を纏った市場帰りの婦人の長い影が リズミカルに家路をたどって行く。4時40分 242km の調査第1日目は無事に終わった。

赤ワインとビールのアピタイザーで始まった夕食は バンギから買って来たパンにインスタントのポタージュ・スープ サラダ 牛肉のステーキ デザートがマンガという献立であった。コックのジュル爺さんは 念入りに料理したにちがいないのだが やはり多少は気になるのか 食事が終わるまで いささか心配気にテーブルの近くに立っていた。これから20日ばかり過ぎた頃には ジュル爺さんは 「ムビ アエケテイ コベ テイ モウレンジ テイ ワリ テイ コーノ ラクウイ ケーケラケ (私しや明日の夕方河馬の娘の料理を食いたいよ)」などと真顔でいう私にからかわれて 腹を抱えて笑いこけるようになるのだが この時はまだかなり緊張していたようだ。それも無理はない 初めて顔を合わせて2日目 日本人の性格も食物の好みもよく判らない時である。

明日はこの町に別れを告げるということもあって 夕食後 同行の連中に誘われて 夜のビストロへ足を運んでみた。はじめて見るビストロの入口は狭く その入口付近にたむろしている10人ばかりの子供は 出入りする客に関心をもち 内部の様子を覗きたげである。

囲りをトタンで囲っただけのビストロには色とりどりの裸電球が揺れ 中央にしつらえたコンクリートの踊り場では 多勢の若者が 早いテンポのリズムののって 強烈なエネルギーをほとぼしらせ 踊り疲れた若者は 回りのテーブルで モカフやソーダ水のグラスを傾けている。生温いモカフで喉をうるほしながら彼らの踊る

姿を見つめているうちに 私は 「この若者たちのたくましいエネルギーは昼間も燃え盛っているのだろうか」と ふと思った。

同じテーブルでモカフのグラスを重ねていた兵隊が しきりに モカフをすすめ ビストロで働いているお嬢さんと踊るようすすめてくれたが アルコールに弱く また 踊をまったくしらない私は固く辞退した。どうやら 私のような取得のない人間はビストロの客としては最低らしい。しかし 飲まず踊らぬ客なのいろいろなと世話をやいてくれる人が多いところを見ると はじめてお目見えした異国人の客ということを割り引いても この国には親切でお人良しが多いようだ。それは 恐らく 豊かな自然があるからこそ育かれたものであろうが ただそれだけの理由で育かれたものではないのかもしれない。

一般に 異民族の支配下に生きることを余儀なくされた人あるいは民族は どちらかといえば 弱い立場におかれたもの特有の保身の術をいつの間にか会得するものである。もちろんそれは 力ではなくて智恵であり 財力であり 支配者に対する抵抗の一つの形でもあろうが むしろ 被支配者の枠からの一つの逃避であり また 被支配者から武力を持たぬ支配者への脱皮でもある。このことは 過去の歴史をひもといてみれば 誰もが否定することのできない厳然たる事実であることが判る。たとえば きびしい自然条件の中で生きてきたアラブの人々が 変転きわまりない戦乱の世を経て 名だたる商人としての活路を見出した事実 祖国をもたぬ流浪の民として生きなければならなかったユダヤの民が商人として大成した事実 いわゆる華僑の呼ばれてきた人々の生きかたなどは そのもっとも良い例であろう。

植民地として生きてきたこの国の人々は やはり一つの枠の中での生活に甘んじなければならなかったはずなのに なぜ 俗にいうずる賢さを身につけなかったのだろうか。性格的に時流に逆らわない民族なのか または 逆らいたくても逆らう術を知らなかったのか 私には判らない。しかし 優しい心を失なわせなかった何かがあったことは確かだろう。

飲みかつ踊る場には似つかわしくない私は 一緒に連れ立ってきた人たちより一足先に ビストロを出て宿舎へ帰った。闇に閉ざされた宿舎の中は 異様なまでに静かであった。綿工場は24時間操業なのであろう 今夜も機械の音が 夜のしじまをふるわせて ゴトンゴトンと聞こえてくる。一日の行動と地質に関する事項のメモを整理し終えた時には もう11時をとっくに過ぎて

いた。ガラス窓の破れをガムテープでふさぎ がらんとしたコンクリート造りの広い部屋の片隅におかれた古びたベッドに身を横たえた。バンギよりもわずかに100m 高いだけの土地なのに 肌寒い夜である。

### 最初の障害

ボッサンゴアからバタンガフォまで三級国道沿いに近道すれば約150km どんなに道が悪くても 6時間もあればゆっくりと行き着ける距離である。私たちははじめ 途中無事に旅行できるように ボッサンゴアからブーカを経由してバタンガフォへ行く径路を考えていたが 同行の連中のすすめで この近道を行くことに変更した。

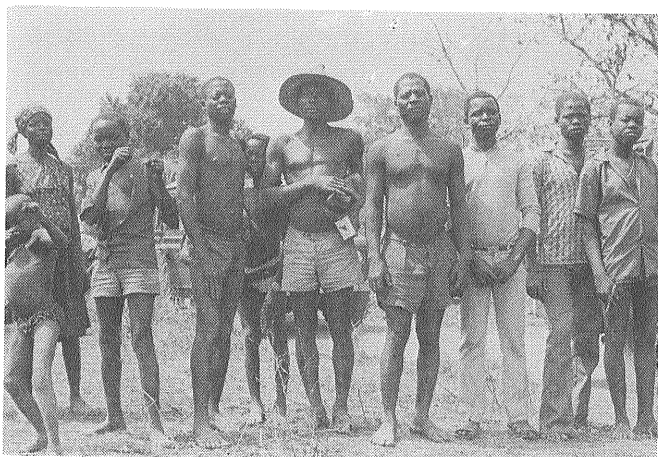
ガソリンを補給し 若干の買物を済ませて 9時30分にボッサンゴアを出発した。相変らず賑わっている市場を過ぎて間もなく 国道1号線からバタンガフォへ通ずる三級国道に入ったとたんに 道はがぜん悪くなった。想像以上の悪路である。2時間余りも費やして走った56km のギャ部落近くで 私が乗っていた車のエンジンが停止した。どうやら バッテリーが悪いらしい。ベテラン運転手のアントアンのてきぱきとした修理で30分後にはどうやら動くようになった。そしてすぐ出発したものの 10km も走らないうちに エンジンは再び停止した。バッテリーがすでに使用限界に達しているらしい。こうなると バッテリーのスペアのない悲しさ じつくりと腰をおちつけて修理するほかはない。

陽はすでに高く 強烈な光の中でアントアンが修理をはじめると 陽気なパイヤ族の男や女房たちがもの珍らしげに集ってきた(第15 16図)。彼らは故障車と山のように積んでいる荷物とに興味をもっているようなそぶりを示してはいるが どうやら お目当は2人のジ

ャポネーズらしい。この村ではパイヤ族の言葉以外は通じないらしく 「ボンジュール ミダム コマタレヴウ」 「バラオ モウ イキンジョニイ」と フランス語とサンゴ語で話しかけてみたが 残念ながらもどちらも通ぜず 女房たちはケラケラ笑うだけで、結局同行9名の中でこの村の住人と話せたのはコックの助手のパスカルだけだ。素焼の器を手にとって見たり マニオクを料理しているのを見たりする私たちを見て この陽気な女房たちは腹を抱えて笑い 小学校へ通っている男の子は 水ガメを頭に載せて カメラに納ってくれた(第17図)。警戒心などは一かけらもなく まるで10年来の知己のような振舞である。あくまでも澄みきった空 うっそうと茂るマンゴ 高原のこの村で自然とともに生きているこの人たちの底抜けの明るさと屈托のなさは きっと 自然に逆らわぬ長い生活の中で 知らず知らずの中に 身についたのである。

2時間ばかりかかって できるだけの手当をした甲斐があって エンジンは動き ようやく出発した。しかし やはり エンジンの調子はまともでなかった。ロープで引張り 時には後ろから押して だましまし走り続けてはいたものの バタンガフォへ50km の地点で完全に立往生してしまった。こうなったら バタンガフォへ急行して バッテリーを調達してくるよりほかに方法がない。故障車と4人を現地に残して 私たちはバタンガフォへ出発することにした。自動車はもちろん 人の姿も絶えてない密林の中の狭く荒れ果てた道だけに 日没後は猛獣が出没するのだらう。残留することになった4人のうち2人は すぐに薪を集めに走り 他の2人は 銃を構えた。

たとえようもないほどに荒れ果てた道を狂ったように突走る車の窓からはみ出した腕を 木枝がひっきりなし



第15図 ボッサンゴアの北東方57km 付近のパイヤ族の若者達 家の白壁には 左はしの少年と同じように ボクサーの姿が画かれているのがしばしばみられるが それは富や強い者へのあこがれの象徴の一つかもしれない



第16図 パイヤ族の女房たち 割合いに小柄で実に愛相がよい 腹部が異常なまでに出ているのは 恐らく偏食による栄養のアンバランスが原因の一つになっているのではなからうか 上半身裸の人が多いが きれにまるい背のつ

に叩く。ベザンガの村で火の手が上っている。萱葺きの屋根が轟音とともに燃え盛っている家の前にたむろする村人の中で一人の老婆が泣いている。燃えているのはこの老婆の家なのであろう。私は打ちひしがれたような弱々しい老婆の姿を見たときに村人たちの愛情がこの老婆を力づけてくれることを祈った。

6時20分 音もなく闇の中を流れるオウアム川の岸に着いた。この川を渡ればパタンガフォダが橋はない。対岸にいた係員に声をかけてフェリーを廻してもらったもの。自動車をフェリーで渡せるのは午後6時までに限られているということで係員に何度頼んでも遂に車を渡してもらうことはできなかった。止むなく運転手のレイモンドとジャン・クロードを車に残して私たちは郡長宅へ向かった。

電燈はなく闇の中にぼつんぼつんと焚火がゆらめいている。マンゴらしい並木が両側に続く道を歩いていることだけは何となく判ったがその他の様子は一切判らない。しかしタムタムの音は高く歌声さえ聞こえてくるので町の中を歩いていることは確からしい。調査用具だけしか持っていないのに私の足は空腹と疲労とですぐにもつれかけていた。思えば今朝起きてからこれまでに口に入れた物はパン4片とココア1杯 缶詰の鯛2匹 それに水だけだ。すぐそこだもうじきだという案内の男の声につられて目標のまったく見えない暗闇の中を果てしのない旅路をたどる思いで必死に歩いた。

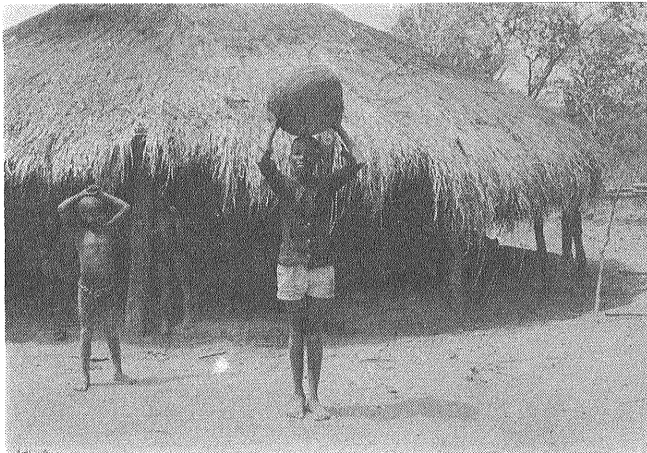
「もういいかげんに歩くのを止める 荷物を投げ捨ててそこに転がってぐっすり眠れ」と悪魔の囁きのようなものが耳をつく。「何くそ 意地でも立止るもの

か」と歯をくいしばって歩く行手にようやくランプの明るい灯が見えた。一刻も早くその灯の元にたどり着こうと気は焦るが頼みの足は一向に進んでくれない。ようやく人声を聞けるところまでやってはきたが道路からそのランプの灯にたどり着くまでには急な石段を数10段も上らなければならないことが判って気が滅入った。まるで這うようにしてその石段を上り郡長に挨拶をして椅子に腰掛けたときに私の全身から一気に力が抜けていった。

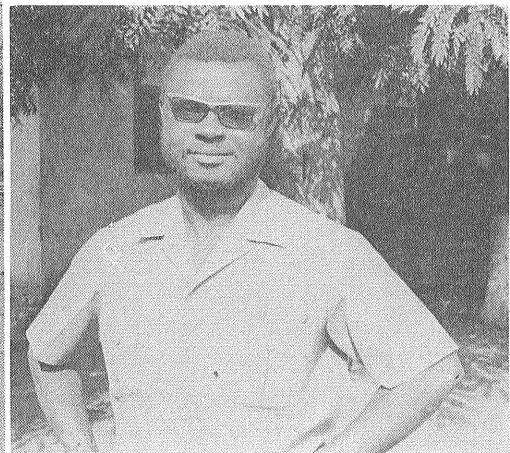
郡長のマカウダ・ピエール氏に窮状を訴えバッテリーの調達とフェリーによる自動車の渡河とを頼んだ。一見とつきにくそうな郡長は実に親切で私たちの頼みを早速聞き入れて下さった(第18図)。

7時20分 レイモンドとジャン・クロードはバッテリー2箇を積んで仲間が待つ密林へ引返して行った。人里を離れた闇の中を走るのは楽ではない。荒れ果てた山道はここが動物王国だけに危険に満ちている。2人が無事に仲間のところへ帰り着きそして一刻も早く皆元気な顔を見せてくれることを祈る一方疲れと空腹とで気持ちが焦立って思わず愚痴をいいそうになった私は引返して行った2人と辛抱強くこの2人を待っている4人の辛さを思いここでも自分の弱さを責めなければならなかった。

この夜食糧のすべてを故障車に積んでいた私たちの手許には空腹を満たすものは何一つなかった。それを察してかまたははるばると訪ずれた客に対するしきたりなのか郡長は私たちを夕食に誘って下さった。顔と手だけを水で洗っただけの身体は精気を取戻すにはまだ程遠い状態ではあったが冷たいビールと美味しいワインが最高のアピタイザーとなりそして日本を離れて以来はじめて賞味する家庭料理の味が飢えていた私



第17図 水ガメを頭にのせてポーズをとってくれたバイヤ族の少年 この家は泥煉瓦に萱葺きの典型的な家の一つで軒先を広くとってあるのは陽陰をつくるため 一般に家は寝るための場所であり 日中の生活はほとんど屋外で



第18図 パタンガフォ郡長 マカウダ・ピエール氏 ジャン・パデル・ボカッサ大統領と同じムバカ族の出身である

を 餓鬼と化したようだ。 同席された郡長と郡長夫人 それに郡長の御令妹の巧みなもてなしに 私は 多種多様の料理を片っ端から口に運び 食事半ば頃には 「ムビ アエケティ コビ ティ バンマラ (私はライオンの料理を食べたいんですよ)」と 冗談をいえるほどに元氣を取戻していた。

大食家ではない私にしては この夜の夕食の量は自分でも驚くほど多かった。 いささか恥ずかしくもあったが 大いに飲みそして大いに食べることを喜ぶ人たちだから 私の食欲は 皆さんに喜ばれこそすれ決して軽蔑されるものではない。

10時過ぎに 郡長さんに送られて宿舎へ帰った。 電燈はなく水道もない。 玄関のドアを開けて中へ入ったとたんに それまで表の暗がりできぐるをまいていたらしい無数の蚊が 久しぶりの人の体臭を嗅ぎつけてかあるいは アルコールの香りに魅せられてか 一斉に飛びこんできた。 防ぐ方法は唯一つ アノラックを着込み 手袋をして 顔を狙ってくる奴を叩き殺すことだ。 あてがわれた部屋の中には鉄製のベッドが一つ置かれているだけで きわめて殺風景である。 私は 作業服を着て編上靴をはいたまま そのベッドに身を横たえ 開を見つめていた。 腹がぐちくなつたせいもあってか 疲れがどーっと出 睡魔が急に襲ってきた。 早くぐっすりと思いたいと思う一方 故障車と現地に残った連中の到着を待ちわびる気持が激しく交叉する。 12時を過ぎた。 だが 人の気配も車の音も聞こえてはこない。 そして 12時20分を確認した後 自分の意に反して 私は不覚にも寝入ってしまった。

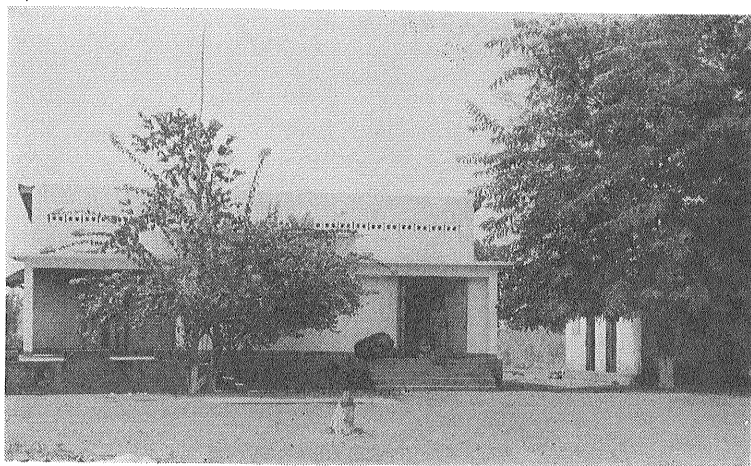
2月5日午前8時 妙な窮屈さで眼をさました。 眼

ざめの原因は作業服と作業靴だ。 2度寝のできない私は まだねむい目をこすりながら しぶしぶとベッドを離れて 表へ出てみた。 まぶしい光がラテライトの庭を一層鮮やかに照らし 玄関近くに咲き乱れているブーゲンビリアの花は 澄み渡る青空と宿舎の白壁に美しく映えている (第19図)。 庭の片隅にランド・ローバーが停っている。 しかも2台だ。 それを見たとなんに 睡気は吹飛んでしまった。 私の姿を見かけて ジュル爺さんがやって来た。 聞けば 2台の車は午前3時に宿舎に到着したようだ。 連中の真面目な頑張りには 本当に頭が下る。

まったく予想もしなかった旅行当初のこの大きな障害に遭遇して これから先の長い旅路に一抹の不安な感じさらにまた 日本と中央アフリカ共和国とを結ぶパイプの役目を果たせるかどうか いや どうしても果たさなければならぬ自分の立場を思うとき たとえこれから先そのような障害や不安にとりつかれようとも その役目を全うしなければならぬ責任感が 私の胸中をかき乱すように去来した。

これから先 不安と責任感とに責められて 眠れぬ夜が続くのであろう。 胸を張ってバンギへ帰れるかどうか この悩みはこれからの長い旅路が終わるまで尽きることはない。 そして最悪のばあいは バンギへ帰り着く日 そしてまた 帰国する日に頂点に達するだろう。 パイプの役目を果たすこと それは 考えれば考えるほど浅学非才の私には 異様なまでの重味をもって情容赦なくのしかかってくる怪物に思えてくる。

(筆者は 鉱床部)



第19図 バタンガフオの国営宿舎  
3LD-Kの小さなものだが 使いやすいつけりになつている 右側の小さな家は使用人用として建てられたものらしいが ふだんはこの宿舎の番をしている四人の寝室として使われている